
Fateなんとなく書いてみた

闇のロマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fateなんとなく書いてみた

【コード】

N1900X

【作者名】

闇のロマン

【あらすじ】

Fateの性転換祭りハーレムとかあんま見ないな、とか思ったのでちと書いてみました。

適当にやっつけていこうと思います。

シリアスあんま得意じゃないんで基本色のない話になるかもですがよろしくおねがいします。

最近小説読んでて気づいたんですが、「」の会話文などの文章の締めって「。」「いらなんだーって知りまして、全体を修正しました。内容は変更していませんのでご安心？ください。

ぶらぶら〜く(前書き)

どうも闇のロマンです。

マイペースにやってくんでよろしく願いしますだー。

ぶるるーぐ

俺の朝は、義妹を起こすことから始まる。

冒頭から突然すまない、どうもはじめまして。

俺の名は衛宮^{サカ}退^ル。

衛宮家の長男であり、なんと・・・。

まあ別になんもない。

ただ一つ言うことがあるとすれば可愛い義理の妹がいるという事ぐらいか。

妹の名前は衛宮^{シロ}白という。

白は本当に優しい娘で、自分より他人を大切にしすぎちゃうぶつちやけ、ちよっとどうかしてる娘だ。

何度も自分を大事にしるといつているのにアイツはまったく。

自らの妹を思い返して、俺は嘆息する。

おそらく白がああいう性格になったのは、ひとえに親父、衛宮切嗣にあるだろう。

俺は当時を思い出すため、記憶を掘り返す。

10年前、俺と白……まだ知り合っていない……は冬木市で起こった原因不明の大災害に巻き込まれた。まるで地獄だった。

見渡せば視界は全て赤に染まっていた。

炎が揺らめき、血がそこらじゅうに撒き散らされているという、ガキには耐えられない凄惨な光景。だが俺は気にも留めなかった。

死にたくない。

その一心だった。

あれほどの災害に見舞われながらも、どうにか繋ぎとめた命。

そう易々と失ってたまるか、と。

必死で地面を這っていた。

這う

這う

這う

地面に散乱するガラスが腕に刺さる。

腹に刺さる。

足に刺さる。

痛みはなかった。

痛みを感じるほどの感覚なんてもうなかったから。

ただただ、俺は生きるために這った。

雨が降り始めた。

体力が奪われる。

寒い

寒い

寒い

なんでこうなった。

自分の運命を呪わずにはいられなかった。

なんで俺がこんな目に。

そう思わずにはいられなかった。

しかし、闇の中には、確かに光も存在した。

体力の限界で脱力していた俺に、影が差した。

俺は顔を上げた。

そこにいたのは一人の男。

泣いていた。

とても幸せそうに。

どこか、安堵しているようだった。

人に救われたと安心した俺は意識を手放した。

その後目を覚ました俺が最初に目にしたのは白い天井だった。
知らない天井・・・というわけでもない。

病院だろう。

病院ではよく見るであろう光景だ。

病院にいと認識したと同時に、自分はその地獄から抜け出せたのだと理解した。
生きれたんだ。

そう解り涙が出そうになり、手で顔を覆おうとして気付いた。
利き腕、右腕がなかった。

ああ、代償は小さくはなかった。
それでも生き残れたんだ。
死ぬよりはましだ。

そう自分を納得させていると、一人のコートの男が病室に入ってきた。

一人の少女と共に。

その少女こそが、俺の義妹となる少女 衛宮 白 だった。

結論から言うと、俺と白はコートの男 衛宮切嗣 に引き取られた。

その数年後の出来事、これが所謂白のターニングポイントというやつだろう。

正義の味方になりたかった。

そう切嗣は言った。

そう言った白はこう言った。

諦めたのか、と。

そう問う彼女に、切嗣はこう返した。

正義の味方は期間限定で、もう自分には志せぬモノだと。

ならば、と白。

「あたしが正義の味方になってやるよ。任せとけて、じいさんの夢は、あたしがちゃんと形にしてやっから！」

どこまでも純粹な笑顔で彼女は言った。

何故だろう、俺はその彼女の在り方が酷く歪に感じ、不安を感じた。

いつかその正義感が歪んでしまい、彼女自身を壊してしまわないかと。

守れるだろうか、俺に。

この歪な正義を掲げた肉親を。

・・・とまあ、なんだかんだ回想をしたが実際守ろうなんて考えちゃいない。

白も子供じゃない、自分のケツは自分で拭くだろう。

俺は正直、他人守れる力なんてないし、自分の身すら守れるかどうか疑わしい。

右腕があれば幾らかマシだったんだろうが、無い物ねだりしても仕方がない。

今日も今日とて、自分のペースで俺は行く。

さて、前置きはここまでにしてそろそろ白を起こしに行くでしょう。どうせ今日もあいつは自分のテリトリー（土蔵）で腹出して寝ているんだろう。

俺は起きたばかりで覚醒しない自分に軽く顔を叩いて起こして、土蔵に向かった。

案の定と言つべきか、白は土蔵でツナギのまま寝ていた。

恐らく昨晚遅くまで何かの修理か解体かなんかして夢中になっていたのだろう。

腹は、出ていない。

「起きろ白、また土蔵で寝て・・・女の子なんだから塵程度には慎みを持ちなさい」

「う・・・ん・・・、ああ兄貴、おはよう」

白は少しサイズのブカブカなツナギの袖で眠そうに眼を擦ると、ほにゃ、っと気の抜けた笑みを浮かべた。

「どうやらまだ半分夢の中のように、時折「うにゅ・・・」とか訳わからん言葉を発している。」

白は基本朝に弱い、結構な比率で朝ごはんは白が作るのだが、朝に強くはない。

だから俺が朝起こしに来ているのだが、だったら俺が朝作ればいいじゃないと提案したことがあるのだが、「兄貴にご飯を作ってあげたい妹の気持ちを少しはわかれ!」、と言われてしまった。

『そんなこと言われても俺は妹キャラではないのでその気持ちは理解できないよマイスターっていうかご飯作ってあげたいってまるで新婚さんみたいだね。はっはっは』

・・・と返したところ本気と書いてマジでぶん殴られた。

照れ隠し・・・と思っておこうと心に決めた。

あれは痛かった。

とりあえず俺はいつまでたっても覚醒しない我が妹を起こすべく、妹の頭頂部に大気をも切り裂かんレベル（嘘）のチヨップをかますのだった。

「とうりゃー」

「あう！」

白は目が覚めて状況を理解したのか頭をさすりながら上目遣いに俺を恨めしげに見た。

俺はそんな妹ににこやかに告げた。

「おはよう」

今日が、始まる。

ぶるるーぐ（後書き）

わけわからんし、ストーリーもへったくれもないものになると思いますが、まあ見てやっってください。
なんか衛宮さんを朝弱い娘にしてみました。
なぜだろうね

第一話（前書き）

どもです

キヤラ崩壊がひどいです

すみません

ではどうぞ

第一話

白をチョップで起こしたあと、白はすぐに朝飯の準備に取り掛かった。

手伝おうとしたがやんわりと断られてしまったので、俺は居間でテレビの眺めていた。

最近巷で原因不明のガス漏れ事故で騒がれているようだ。

正直な話人事ではない。

原因不明というのも人の不安を駆り立てる。

俺はともかく白はまだ高校生だ。

こんな訳の分からない事件で危険にあつて欲しくない。

自分で事件に突っ込むというなら自己責任で止めはしないが。

ちなみに俺は学校で清掃員をやっている。

日々窓ガラス拭いたりトイレ磨いたりしている。

学校の子達には清掃のお兄さんと呼ばれ親しまれている。

たまにタメ口の子がいるが、将来彼らが上司にタメ口使って困らないように日々チョップして思い知らせている。

いい子達ばかりだからすぐに分かってくれるが。

「あにきー、ご飯出来たから運ぶの手伝ってくれ！」

「うい」

そんなこんなでいつの間にか食事の仕度が出来たようだ。

この妹は本当に出来る子だ。

朝にこそ弱いのご飯は美味しい、掃除も出来る、つまり家事は完璧だ。

少し男勝りな口調と性格だが身内びいきせずとも良い娘だし可愛い。だのに何故この娘の浮いた話を聞かないのだろうか。お兄ちゃん、妹の将来が心配だと、俺は溜息を吐いた。

「じゃあ、先に学校行ってるぞ白」

朝飯を食べたあと、俺は仕事のため学校に向かうべく家を出ようとしていた。

白と違って俺は学生ではないので、白ほどゆっくりは出来ない。

「あ、待ってくれ、あたしも一緒に行く」

「ん？いつも思うがお前はそんなに急ぐことないんだから時間まで家でゆっくりしてればいいのに」

「いいんだ、あたしが兄貴と一緒にいきたいだけなんだから、それに朝練もあるしな」

この妹はなんとというか、嬉しいこと言ってくれる。

兄貴冥利に尽きるが、今だ兄離れしない妹の将来がやはりお兄ちゃんに心配です。

だが俺も人の事は言えなかったりする。

生まれてこの方彼女なんて出来たことないし。

まあ作るうと思って奮起したことも未だかつてないが。

「じゃあ一緒に行くか」

「うん」

「じゃあ、また家でね。兄貴仕事頑張つてね」

「おうよ、お前も部活に授業頑張れよ」

あれから学校 穂群原学園 に着いた俺たちは校門で別れた。
白は弓道部に所属しており、朝練がある。

とはいえ朝練には多少時間が早いが我が妹のことだ。

道場の掃除でもして暇を潰すことだろう。
軽く俺の仕事が取られている気もするが。

基本更衣室、女子トイレの類以外の場所の掃除は俺の管轄だ。

後は、色々と教員の方々のサポート的な事をしている。

プリントを印刷したり、授業で使う少し学生には触らせられないものを運んだりなどだ。

「さて、まずは職員室行くか」

「おはようございます」

職員室に行くと、先生方がまばらに挨拶を返してくれた。

俺はタイムカードを確認した。
刹那。

「おはようございます、退君。」

「うおっ！」

気配すら感じさせず、突然声をかけられ驚きの声を上げてしまった。
気配を感じさせずに挨拶する人なんて俺は一人しか知らない。

「びつくりしましたよ。おはようございます、葛木先生」

「おはようございます。それと退君、私のことは宗香で結構です」

「それはプライベートでなら、ということ・・・」

このレディースのスーツに身を纏ったショートヘアのメガネ美人の
先生 葛木 宗香^{そっか} は俺がこの学校の清掃員として配属された
当初から何かと気にしてくれていた人だ。

実にクールで無表情なので感情の起伏がわかりずらいのだが、何か
と結構一緒にいることが多かったりするので、なんだかもう彼女の
感情の機微が判るようになってしまった。

「それは残念です。それより退君、少しお願いがあるのですが」

「あ、はい。なんででしょう？」

「朝礼で配るプリントが数があるので運ぶのを手伝っていただけま
すか？」

「わかりました、教室まで運べばよろしいんですね？」

「はい、今運んできますので少しお待ちください」

そう言っつて葛木先生は職員室の自分の席から大量のプリントを持ってきた。

なんでこんなにあるんだ。

「凄いですね」

「一限目の授業で使うプリントもありますので、そのせいかと」

「なるほど、では確かにお預かりしました。教室まで運んでおきますね」

「あ、あと、退君」

「はい？」

「あの、今日はお昼は何を？」

昼・・・あ、そういえば弁当忘れたな。

仕方ない、購買は混むし、コンビニにでも行くとするか。

「そういえば弁当を忘れてきました、まあでも、コンビニでも調達します」

「いえ、よろしければ一緒にませんか？実はお弁当を作りすぎてしまったのです」

弁当作りすぎるとか結構おっちょこちょいなんですか？先生。
しかし、これはなんておいしいお誘いだろうか。
この申し出を受けない手はない。

「本当ですか？だったら是非一緒に緒させてください！助かります！」

「……！！あ、う……」

そういつて俺はすっかり葛木先生の手を取ってしまった。

すると先生はみるみる赤くなってしまい、プシューという音をたてて固まってしまった。

まあしかし、割とあることだし、時間が経てば元にもどる上にその間言われたことはすっかり覚えていたので問題はない。

「楽しみにしていますね、では」

一言言つて俺はプリントを持ってその場を後にした。

第一話（後書き）

実は葛木先生って20代なんですよね。

はい、という訳で葛木先生登場です。

普段クールなので突発的な事に弱い（手を握られるような）、という設定にしてみました。

本当に崩壊がひどいですね。すみません。

でもそれでも読んでくださる方がいれば嬉しいな。

第二話（前書き）

すみません、すごく短いですが、
眠くて仕方なかったんだ！

第二話

プリントを教室に運んだ後、俺は学校周辺の清掃活動に勤しむことにした。

元々それが本業であるし、怠るわけにはいかない。

「さて、結構雑草が増えてきたな」

俺は作業着の袖を折り、作業に取り掛かる。

雑草は根っこから抜かないとあまり意味がないのでしっかり手作業でやる。

「また朝からそんな雑務やってるわけ？まあ、あなたにはお似合いかしらね」

すると割と聴きなれた声が耳に入る。

振り向くと案の定、彼女 間桐椎名 だった。

青いロングウェーブヘアが風に撫でられるその姿は実に美しい。

だが、彼女の正確はあまりよろしくない。

まず、彼女は実に素直じゃない。

所謂、ツンデレというやつなのだろう。

「相変わらず憎まれ口叩く奴だねお前は」

「ふん、いいじゃない。あなたと私の仲なのだから」

まあ確かに、俺と彼女は割と長い付き合いになる。

彼女の妹 間桐桜 も同様にだ。

そして彼女たち姉妹は白とも仲がいい。

桜は白を慕っているし、椎名は憎まれ口こそ叩くもののまんざらでもなさそうだ。

きつと彼女の素直になれない性格と白のお人好しな性格は、なんだかんだでバランスが取れているのだろう。

「そついやお前、部活はどうした？朝練あるだろう？」

「あなたがまたここでせつせと草むしりでもしているんだろうと思つてね、手伝いに来てあげたの。」

断るなんて言わないでね。せつかくの誠意ある行動なのだから」

相変わらず素直じゃない。

しかし、凄く優しい娘なのだ。

割と面倒見もよく、白と同じ部に所属していて腕も良い。

彼女の美貌も相余って性別問わず人気のある。

今この場にはいないが黒髪のツインテール美少女 遠坂凜 と二人合わせて【穂群原学園美少女の2強】とまで言われているのだとか。

「……じゃあお願いしようかな」

「ふふふ、任せて頂戴」

あれから数十分、椎名は授業があるので去っていった。

それから俺は学校を清掃して回り、昼になったので葛木先生との約束のため屋上に向かった。

「お待たせしました先生」

「そこまで待っていませんよ、ではお弁当です、どうぞ」

受け取った弁当はシンプルな黒い弁当箱だ。

中には卵焼きや意外だったがタコさんウィンナーなど、弁当の定番メニューが勢揃いだった。

作りすぎたと言っていたし、手作りなのだろう。ありがたいことだ。

「では、遠慮なくいただきます」

「どうぞ、召し上がってください」

俺は先生から借りた箸で弁当を食べ始める。すると先生が話しかけてくる。

「いかがですか？」

「本当に美味しいですよ、この弁当、白に引けを取らないなこれは！」

「ふふ、それはよかったです」

本当に美味しい。

こんなに家庭的な先生だったとは思わなかった。

いつも無表情なのでてっきり食事などにあまり頓着しないタイプだ

と思っていた。

人って見た目に寄らない、それを知ることが出来た今日の昼だった。

こんな平和がいつまでも続く。

そう思っていたのだが、まさかその平穏が崩れ去るのが刻一刻と迫っているとは、俺は思っても見なかった。

そして俺は・・・運命に出会った。

第二話（後書き）

多分そろそろサーヴァント登場だと思います。

第三話（前書き）

結構投稿早くできた気がしね？
俺はする！

第三話

放課後、部活で忙しいであろう白より先に帰宅した俺は夕飯の準備に取り掛かった。

そしてキッチンで肉や野菜の下拵え（したごしらえ）をしていると、家のインターホンがなった。

「あ、もうそんな時間かな？」

俺は手を洗って、玄関へ向かい扉を開けた。

そこには紫色の大人しそうな女の子 間桐桜 がいた。

彼女は白の後輩で同じく弓道部に所属している、今日会った椎名の妹だ。

ただし姉と違って性格はまったく逆とあっていい。しかし優しく、気を使えるという点に置いては間桐姉妹は実に似ている。

「こんばんは桜、今日もわざわざすまないね。白は居残って道場の掃除でもしてるのかい？」

「こんばんはお兄さん、先輩は相変わらずですよ。ふふっ、とても先輩らしいと思いますけど」

そう言って笑う彼女は実に楽しそうだ。

彼女はとても白を慕っており、今朝はいなかったが普段は結構な頻度で我が家の朝飯の準備を手伝ってくれている。因みに理由は定かではない、以前に白が病気で倒れた際に来るようになったのだが・

・もはやソツチ系の趣味なのだろうか？この娘は。いやいや、そんなことは・・・あるまいよ。

「じゃあ準備に取り掛かるか、行こうか桜」

「はい、今日もご教授願います、お兄さん」

と、キッチンに赴こうとした刹那。

「たっだいまあああああああああああああああ！！」

酷い大声で扉が壊れんばかりの力で思い切り扉を開けた音が背後から聞こえた。

溜息をしたあと振り向くと案の定というべきかわかつてはいたが、白の姉貴分がいた。

「今帰ったわよ〜！ご飯は？」

「まだですよ藤村先生、今から準備に取り掛かるところだったんです」

「というわけだから大河はとっとと居間で冬眠してろ、やかましいから」

「ぶーぶー、そんな言い方ないんじゃない？退は桜ちゃんみたいにもう少し私に優しくしてもいいと 思うわよー。あとタイガーって言うなああああああああああああああああああああああああああああー！」

そう目の前で喚いている女性 藤村大河 は穂群原学園の教師をしており、弓道部の顧問をしている。

能天気な見た目に反して割としっかりしており、そこそこに頼れる人間ののだが、普段が能天気すぎて正直頼ろうと思えない少し残念な先生だ。

しかし剣道は段持ちで非常に優れており、また明朗快活な性格で親しみやすいので生徒たちにも人気がある。

タイガーと呼ばれるのを気にしているようだが実際にそう見えるわけ、仕方ない。

「俺が大河に優しくするのは本当にお前が悩んだりしている時だけだろうさ、優しくしなくてもなんら問題ない奴に優しくするなんて必要性ないだろ？」

「お兄さん・・・相変わらず藤村先生にはドライですね・・・」

「でしょ？桜ちゃん、慰めて〜」

言って大河は桜ちゃんに抱きつこうとした、が。

「すみません先生、夕飯の仕度に取り掛からないといけませんから、行きましようかお兄さん」

「・・・。」

「大河・・・、桜マイペースな娘だから・・・」

「うがあああああああああ！不貞寝してやるうううううううううううう！」

寝るのかよと心の中でツッコミを入れた後、俺はキッチンに向かい桜と夕食の準備に取り掛かった。

準備が終わり、白の帰りを待っていたがいつまで経っても白は帰ってこなかった。

それなりにいつものことではあるが、桜と大河は家に帰ってしまった。

俺は仕方なく白を探しに家を出た。

俺は恐らくいる可能性の高い学校にいた。

もしかしたらまだ掃除に夢中になっている可能性も否めない。

俺は弓道場に向かった・・・がしかし、そこには綺麗になった道場の閑散とした空気はなく白はいなかった。

次は校庭に出る。そこで俺は妙な違和感を見つけた。

それは校庭の砂のコンディションだ。普通はわからないだろうが、俺は毎日この校庭にトンボをかけているし、野球部やソフト部の子達も部活の最後にトンボをかけて帰るのだ。

だから、流石にこんなに広範囲を暴れ回ったような不自然な砂の形をしている訳がない。

しかし、その理由は気になるが気にしても詮無きことだし俺には及びもつかないだろう。

俺は考えることを放棄して、学校を後にした。

それから商店街や、新都、公園、柳洞寺など探して回ったが白の姿はなかった。

もしかしたら入れ違いなのかもしれないと、俺は帰路についた。

家には電気がついていて。しかし、なんだろういつもと家の空気が違う気がする。

何故だろう、凄く不安だ。

「ただいま！」

俺が声を出した刹那、なにやら居間でドタバタと物音がした。

俺は不審に思いそつと扉を開けた。

そこには白がいたのだが……。

「お、おかえり兄貴！遅かったな！」

「おかえりなさい退さん、それと夜分遅くに申し訳ございません。お邪魔していますわ」

何故穂群原学園美少女の2強の一角の遠坂さんがここにいるのだ……。

遠坂さんは綺麗な黒髪ツイントールを揺らし、どこか優雅に軽く頭を下げてきた。

まあそれはいい。まだ妥協出来る。しかしだ……。

「白、この際お前が連絡もないのに帰りが遅くて心配で色々走り回

らされたという件については良しと　しよ。無事だったならそれでいい、いいんだがな？・・・そのレインコートの方はどちら様だ？」

「あ、えつと・・・彼女は親父の知り合いで、親父に会いに来てくれたらしいんだが・・・もう亡くなった事を知らなかったらしいんだ。それでえつと、とりあえずセイバー、あたしの兄貴だ。挨拶してくれ」

「白の兄君でしたか、私はセイバーと申します。お見知りおきを」

この出会いが良い意味でも悪い意味でもこれからの人生の大きな転機となるとは、俺はこのとき思ってもみなかった。

日常は非日常へ加速していく。

第三話（後書き）

セイバーでました。

言うてもチヨロっとなですがね。

さて・・・寝るか。

第四話（前書き）

俺の更新、何故か加速するの巻

第四話

セイバーさんから自己紹介された俺は自分もあらためて自己紹介し、気になっていた本題に入った。

「それで、遠坂さんはなんでここに？ウチの白と交友関係があったなんて意外だな」

「いや、別にあたし達は「そうなんです。今日は偶然帰りが遅くなりまして、これから家で一人で食事すると言ったら白さんが食事に誘ってくださいまして」・・・え？」

(話し合わせなさい)

(む、すまん・・・兄貴には内緒だったな)

(まったく、お兄さんは魔術を知らないんだから巻き込むわけにいかないでしょう！)

(白はもう少し事の重要性をもっと認識すべきです)

(うう、ごめん・・・)

なんか二人は突然コソコソと耳打ちし合い始めた。

なんて仲睦まじいのだろう、遠坂さんはてっきり猫でも被っているかと思っていたがどうやら思い違いをしていたようだ。

俺は勘違いしていたことをすまない遠坂さんと心中で謝った。

「ああ、無理に言わなくていいんだ。女の子同士だし女の子同士の

隠し事なんて事もあるだろう。少し寂しい気がしなくもないが、そういう共通の秘密が持てるような友達が白にいるのを知ることが出来たんだからむしろ来てくれてありがたかった。ありがとう遠坂さん」

「へっ？あ、いえ、こちらこそ白さんにはいつもお世話になっていきますので・・・お、おほほほほ」

「（なにさ、おほほほほって・・・ああ、遠坂突然感謝されて、柄にもなく照れて「何か言ったかしら・・・？」「ううん何も」）

本当に仲いいんだな、たびたび内緒話しちゃって。

ここは俺は退散すべきだろう、そう思い俺は腰を上げた。そんな俺の行動を見て白はキョトンとした表情をした。

「あれ？兄貴どっか行くのか？」

「今日はきつとあれだろう？二人で色々内緒話したりしたいだろう？だから俺は退散しようと思ってるね。ああ、そうだ、棚にお菓子とかお茶補充してあるから好きにしなよ白」

「あ、ああ、わかった・・・（完璧に友達だと思い込んでるな兄貴・・・）」

「（そうね・・・巻き込まないためではあるけれど何か悪い気がしてきたわ・・・）」

俺はまた内緒話を始めた二人を後目に今を出ようとした。

しかしその瞬間偶然目の箸に見えたセイバーさんに俺は言葉を失う羽目となった。

あのレインコートの隙間から見える甲冑っぱいの・・・ナニ？
もしかして・・・コスプレイヤーというやつなんだろうか？
もしかして外国で日本文化を間違って吸収してきてしまった類の方
なんだろうか？

「あのセイバーさん、最後に一ついいかな？」

「はい、なんでしょうか？」

「そのレインコートの隙間から見えるその甲冑っぱいの・・・ナニ？」

「・・・えっ・・・？」

三人が硬直した。もしや触れてはならない話題だったのだろうか。
それともレインコートで隠しきったつもりだったのだろうか？とい
うかそもそも不自然にレインコートが盛り上がっているんだから最
初から気づけよ俺。

「えっと・・・聞いちゃいけない話題だった？ああと・・・コス
プレってやつなのかな？」

「そ、そうコスプレだよ兄貴！セイバーは生粋のコスプレ好きらし
いんだ！」

「そうなんです！騎士甲冑だけでなくメイド服や、ネコミミウエイ
トレスにもなっちゃうくらいのコスプレイヤーらしいんです！」

「はっ！？ちょ・・・シロ！？それにメイガ・・・リンン！？」

やはりそうだったか・・・いや何となく想像は付いていたんだよ！
そうか、確かにここまで可愛らしい娘がメイド服やらなんやらで着
飾ればさぞかし素晴らしいことだろう。

俺にそういった物を嗜好とする趣味はないが、セイバーさんだつた
ら良いかもしれない。

学校のアニオタ男性教師の方もネコミミメイドは素晴らしいと語っ
ていたし！

俺はなにやら顔を赤くして俯いて恥ずかしそうにするセイバーさん
の前に腰を屈め視線を合わせ、ポンと肩に手を置いた。

「セイバーさん、趣味は人それぞれだよ。だから俺は決してその趣
味を批判したりしない・・・。その趣味は色々と壁にぶつかること
が多いかもしれないが・・・頑張つて！」

「うう・・・お、お気遣い感謝いたします、兄君・・・」

「退でいいさ、セイバーさん・・・」

「くう・・・」

なにやらセイバーさんが男泣きっぽいことを始めた。

俺はただ黙って抱きしめてあげた、彼女が泣き止むまで・・・。

最優のサーヴァントが、一般人にコスプレイヤーと勘違いされ拳
句の果てに慰められた・・・そんな1コマ。

「じゃああたしは遠坂送ってくるよ」

あの後、そう言って白はセイバーさんと遠坂さんを引き連れて家を出た。

俺は女の子だけじゃ危ないだろうと同行を申し出たのだが、セイバーさんは世界でも有名な剣術家らしく大丈夫だと断られてしまった。少し心配だ。

何もなければいいのだが……。

酷く嫌な予感がする。

何か面倒な事が起こると、俺の第六感は告げている。

そう、俺の感も捨てたものじゃない。

俺がこんなことを考えているのと同時期に、彼女たちは大変な目に遭っていたのだから。

「やっっちゃえ、バーサーカー……」

「……!!」

第四話（後書き）

なんか今日は筆が進んだなー
キャラ崩壊がひどかったが

そういえばペルソナ4のアニメがテンポが異様に早かったな・・・
ゲームクリアしてたから主人公が喋ってるのに違和感感じちゃうし、
マジコイのアニメはなんか初回から最終回だし・・・どうなってんだ一体。

第五話（前書き）

シリアスと思うじゃない？
残念、俺には続かない・・・。

第五話

S i d e : 白

なんだ・・・これ？

教会で聖杯戦争の参加を決意し、十年前の火災の真実を知ったあたし　衛宮白　は目の前にいる存在に絶句した。

圧倒的な威圧感、目の前にいる者は危険だと肌で感じる。体どころか意識まで凍ってしまいそうだ。

その存在　女性　は見た目こそ普通だが内包している力は全くと言っていい程に普通じゃなかった。

その女性は前髪で顔が隠れているが、赤く輝く瞳がこちらを見ていることはわかる。

女性を引き連れているのは銀髪の少女、あたしがいつかの学校の帰り道にすれ違った娘だ。

「こんばんはお姉ちゃん、こうして会うのは二度目だね。そしてはじめましてリン。私はイリヤスフィール、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言った方がいいかしら？」

「アインツベルン!？」

少女の名乗りには遠坂は驚いた様子だ。遠坂は知っているのか、この少女のことを。

遠坂の様子を察するに有名な魔術師の家系なんだろう。だがそんなことより気になるのはイリヤスフィール・・・長いのでイリヤと呼ぶが、イリヤの背後に佇む女性だ。

浅黒い肌に民族衣装のようなものを身にまとっている。

「それに何なのあのサーヴァント、単純な能力ならセイバー以上じゃない・・・なんてデタラメ・・・！！アーチャー、アレと貴方が正面から戦うのはあまりに分が悪すぎるわ。あなた本来の戦い方に専念すべきよ」

そう呟く遠坂、どうやら自分のサーヴァント　アーチャー　に向かつて指示しているようだ。

霊体化していて姿の見えないアーチャーは応答する。

「了解したが、守りはどうする？あれほどの力を内包しているのだ。生半可な守りでは凌げまい」

アーチャーは己の懸念をマスターに尋ねる。

遠坂はそれに苦虫を噛み潰したような表情ではあるが答えた。

「流石に倒すことはできないでしょうけどこっちは三人、凌ぐだけなら何とでもなるわ。いえ、何とかする」

「了解した」

了解したアーチャーはどうやらその場から去ったようであった。すると遠坂は今度はあたしに視線を合わせた。

「衛宮さん、逃げるも戦うも貴方の意志次第よ。・・・けど出来ることなら何とか逃げなさい」

「大丈夫だ、覚悟は・・・出来てる」

「そう・・・ならいいわ、セイバーも準備はいい？」

「はい、シロが決めたことならば・・・私はシロの、マスターの為に全力を尽くすまでです」

あたしは頷いて少女の方へ向き直った。

少女は涼しげな表情を浮かべながら軽い口調で訪ねてきた。

「相談事は終わった？なら、始めちゃっていいかしら？」

あたし達は身構えた。

来るべき戦闘に備えて。

そして。

「やっちゃえ！バーサーカー！」

「！！！」

幕は開く。

Side:退

「・・・!？」

白達を見送ってからしばらくして、異常なまでに悪寒がした。

今まで感じてきたチャチなレベルじゃない。

死に直結しているんじゃないかと思われるほどの悪寒。

もしかして、白達に何かあったのだろうかと不安が過ぎる。

「・・・行くか」

心配で仕方ない、何かあってから後悔しては遅いのだ。

これが白の理想の為に決めた選択でという前提があるならば俺はあまり関与しないが、不慮の事故となったりするならば話は別だし命に関わるならば尚更だ。

兄として、助けられないわけにはいかない。

いや、助けられないとしてもだ。行かなければならない。

妹の為なら俺はどんな傷だって不名誉だって背負う。

俺は衛宮白の兄なんだから。

「さて、その前に・・・あの人から貰ったアレを持っていくか」

万が一、あの人みたいな非現実的な者に襲われたりしてたりしたら、手ぶらじゃ敵わないからな。

辿り着いた其処は戦場だった。

そこかしこが破壊され、何があったんだと思わず誰かに問いたくなるような惨状だ。

だがそこに俺の妹とその友人たちはいた。

しかし、白と遠坂さんは動けもしないようだった。

確かに、と俺は納得せざるをえなかった。

俺は遠くで戦っているセイバーさんと謎の褐色肌の女性を見て、その圧倒的な光景を、彼女らと同じ光景を目の当たりにしているのだから納得するしかない。

俺は一瞬で頭を切り替えた。

ここはどうやら俺の知っている日常とは全くの別物らしい。

どこからか飛来している何か　弓だろうか　が、セイバーさんを援護しているようだがあの女性はものともしていないようだった。

お互いの剣戟がぶつかり合い火花が散る。

その衝撃は窺い知れるものではない、凡そ一般人に受けきれない一撃ではないだろう。

あれほどの練度を持つセイバーさんもそうだが、あの女性も何者なのだろう。

しかし今はそんなことをゆっくりと考えている暇はない。

何故ならば拮抗していたパワーバランスが徐々に崩れてきたからだ。セイバーさんが押され始めてきたのだ。

俺は即座に飛び出す。

一本しかない腕に一本の刀を携えて。

刹那、セイバーさんが女性の岩を切り抜いたような大剣の一閃を諸に受け止め体勢を崩す。

是非もない。

「駆ける・・・！」

一切の無駄を無くし最速の一步を踏み込む。

これを繰り返す行うのは足への負担が大きいがためらっている暇はない。

セイバーさんに刻一刻と危険が迫っているのだ。
女性がセイバーさんに向かって大剣を一閃する。

俺は思い切り体勢を低くし、女性の一閃とセイバーさんの間に割って入る。

そして俺は来るべき衝撃に備えその場で屈み、手に持った刀を地面に突き立てて受け止めるべく足に力を入れる。

「・・・!? 兄君!?!」

「あ、兄貴!!」

「な、なんでここに!?!」

「くっ・・・!!」

遠くからの弓の援護が大剣に命中し、勢いを緩和させる。

内心で姿の見えない援護者に感謝し、その一撃を受け止めた。

「ぐっ・・・!!」

重い、だが先程の援護のおかげか受け止められないほどじゃない。

これが援護なしだったならば間違いなく俺は押しつぶされていただろう。

俺は攻撃の衝撃を利用し、そのまま後ろに思い切り飛んだ。

「ふう・・・」

俺は相手が追撃してこないことを確認してから一息ついた。
冷や汗が酷い。

震えはない、実は殺し合いは初めてじゃない。
以前に両儀と名乗る少女と一戦交えたことがある。

その時は両儀の友達の黒桐という眼鏡の少女に助けられたが、この
褐色肌の女性は両儀と違いあの特異な眼を持ってないにしても、そ
れに匹敵する恐ろしさがある。

「大丈夫か兄貴!？」

心配だったのだろう。白が近寄ってこようとすする。

「阿呆!油断するんじゃない、まだ終わっちゃいねえんだぞ!！」

「・・・!!！」

しかし俺はそれを一喝した。

ここで見ていて分かったが足手纏いの白が敵に少しでも近づくのは
得策じゃない。

俺はこちらを何故かキョトンとした表情で見る女性に対峙する。
すると女性は俯きくつくつ、と笑い始めた。

「大したものだ、我が一撃に仲間を助けるべく潜り込み、あまつさ
え受け止めるとは・・・その刀、何か特殊な霊装か？」

「しゃ、喋った!？」

すると後ろにいた遠坂さんから素っ頓狂な声上がる。

そりゃ喋るだろう、力こそ人外じみているが人?なのだから。

それともこの戦いを切り抜けるのに重要なキーパーソンだとも言

うのか？

「どうした、遠坂さん。それはこの場で重要なことなのか？」

「だってバーサーカーなんでしょう！？バーサーカーは理性を代償に強力な力を得たサーヴァント、本来なら言葉を話すような知性を持たない筈よ！！それに退さんも何よ今の移動速度、貴方魔術を知らないんじゃないの！？それにその刀は一体・・・結構な魔力を内包しているようだけど・・・」

「はっ・・・えっと、魔術って・・・なに？」

「え？」

「え？」

お互いに？を浮かべる。

その様子を見た女性　　バーサーカーさん？　　は愉快そうに笑った。

「ふふ、実に面白い。魔術の存在を知らず魔術を使わずしてその実力か。一切の無駄を無くした動きの成せる技か・・・」

「リン、驚くのは無理もないわ。私も驚いたもの」

見知らぬ銀髪の少女が会話に割って入ってくる。

少女はどうやらバーサーカーの主人的な人物なのだろう。

その少女もバーサーカーに理性があつたのに驚いたという。

一体どういふことなんだ？そもそも魔術って何？

「バーサーカーは勇猛EXのスキルを持っているみたいでね、どうやら狂化させる以外では理性を失わないようなの」

「そんな情報を私たちに教えるだなんて・・・随分余裕ね？」

「そりゃそうよ、貴方達じゃ私のバーサーカーに勝てるわけないもの。なんて言っただって私のバーサーカーはあの大英雄ヘラクレスなんだから！」

「ヘラクレス！？そんな英雄がバーサーカーで能力強化されている上に理性があるだなんて・・・ってじゃあまさか宝具は！？」

「そう、十二の試練^{ト・フェルト}。12回の蘇生魔術の重ねがけ、だからバーサーカーは一、二回殺したくらいじゃ死なないんだから！」

それを少女が言つと、バーサーカーは少し悲しそうな表情で呟く。

「死なないといつてもかなり痛いのだが・・・だというのにどいつもこいつも『まあこいつ十二の試練越えてるし大丈夫だろ』って思いつきり無理難題押し付けおつて、そのせいで男も出来ないし・・・うう・・・」

「・・・」

な、なんか可哀想になってきたんだが・・・。
しかし、恐らく175cm越えであろう長身のワイルドな魅力の女性がシユンと落ち込んでいると先程まで殺しあっていたとはいえ、こつ・・・クルものがある。

「えつと・・・バーサーカー？」

「ぐすつ、なんだ……？勇敢なる者？」

「それって俺のことか？まあいいが、まあなんだ。あんまり気に入るな、俺はアンタみたいなワイルドなタイプ嫌いじゃないぞ？は、ははは……」

口説いてどうする俺！

何サラつと変なこと言ってるんだよ！

恥ずかしい……。

「え、あ……うむ。あ、ありがとう……」

俺たちはお互い顔をあわせて赤くなって俯いてしまう。

そんな霧散した戦場空気に、除け者だった白とセイバーと援護者アーチャー　が呟いた。

「なんでさ……」「なんですか……」「何故だ……」

この後、退達はまた戦いを再開するのだろうか？
それは、神のみぞ知る。

第五話（後書き）

どうも、闇口マです。

今回主人公が戦闘に乱入しましたが、せっかくなのでステータスだけでも参考につくってみました。

名前 衛宮 退

性別 男性

身長・体重 182 / 5cm 72 / 3kg

属性 秩序・中庸

筋力：D

耐久：E

敏捷：A+

魔力：E

幸運：B+

宝具：？

対魔力：D

いやあ、速さしか基本はありませんね。

腕があれば筋力がC+は言ったかもしれない。

また、バーサーカーのスキル設定については完全に私のオリジナルです。

バーサーカーのキャラが気に障った方は申し訳ありませんでした。なんか酷いバランスブレイカーになる気がしますね、いやなりませんけどね。

また、感想にて指摘を受けた点について多少の修正をしました。

まあうまく出来ているかどうかは全くわかりませんが。

では。

第六話（前書き）

今回いつもより短いですが
ではさしあげ。

第六話

「今日は興が冷めたわ・・・今度会ったら絶対に殺してあげるねお姉ちゃん」

「む、マスター。それはオヤジギャグというやつですね？いやなかなか・・・」

「何言ってるのバーサーカー！・・・もう、帰るわよ！」

「承知。ではセイバー、そして勇敢なる者・・・いやサガルと呼ばせてもらおうか。再び手合わせできる其の時を楽しみにしているぞ」

俺は最後まで気の抜けた雰囲気は抜けないことに苦笑した。
手合わせしたというほどのことではないと思うのだが、まあいいだろう。

「はい、バーサーカー。今度は理性ある貴方と正々堂々と剣を交えたいものだ」

「ははは・・・俺はもうあんな危険な思いするのは御免だぞ」

俺がそう言うとバーサーカーはくっくっ、と笑った。

本当に戦っていた時とはまるで別人だと改めて驚かされる。

「まあそうつれないことを言っな。我とお前の仲ではないか」

「どづい仲だ・・・」

すっかり友達ムードを出して接してくるバーサーカーにたじろぐ。しかしあまりに上機嫌に言ってくるので、俺はまあ友達でもいいか、減るものでもないしと思うことにした。

「もう！何してるのバーサーカー、早く帰るわよ！」

既にバーサーカーから少し離れた場所を歩いていたイリヤスフィール　長いな、イリヤでいいか　は今だ俺の前にいるバーサーカーに不満げに言う。

魔術師というのはよくわからないが彼女は見た目同様の性格のようだ。

「申し訳ありませんマスター、ではまた相見えようぞ」

「で、どういふこと？」

何故か敬語のなくなった遠坂さんが納得がいかないといった不満顔で俺に詰め寄ってきた。

というかやっぱり猫被っていたのか、俺の目は間違っていないかったんだな。

「どう、とは？」

「私も気になります。兄君が私を助けてくださった時のあの移動速度、サーヴァント並み・・・それもあれはランサーに匹敵するかそれ以上」

「はあ・・・」

俺は気のない返事をする他なかった。

何故なら俺はランサーというのは勿論、サーヴァントとかいうものについても全くの知らないのだから。

俺が困っているのを見兼ねたのだろう。

正直ずっと空気だった白が口を挟んでくる。

「なあ、とりあえず家に戻らないか？話すならそのあとでも出来るだろう？」

「そうね、そうしましょ」

「了解しました」

どうやら一時だが呪縛から逃れられたようだ。

俺は内心で白に感謝し、皆で揃って帰路についた。

第三者に観察されていたのにも気付くことなく。

とある民家の屋根の上、そこに観察者はいた。

「ほお、面白いじゃねえか・・・生身であるバーサーカー（バケモン）を相手取るとはなあ。全くどうして根性据わったイイ男じゃね

えか、くつくつ・・・」

退達を観察していたのは青いボディースーツに身を纏い、毒々しいほどに赤い槍を携えた女だ。

女はニヤリと楽しげに顔を緩ませる。

しかし女はその愉快げな表情を歪ませ舌打ちする。

「やれやれ、マスターの命令がなけりゃ一戦交えてえところだったんだがな・・・でも、まああの戦力差じゃあ流石に無理があるか」

そう。

マスター本人たちはどうとでもなる。しかし彼らにはサーヴァントが二人もいる。

それも三騎士の内の二角、セイバーとアーチャーだ。

あの二人相手に彼女一人では分が悪い。

さらには彼女にとって今現在一番気になる存在、衛宮退もいる。

ただの人間であるにも関わらずサーヴァントと剣を交えることが出来る異様な存在。

魔術師ということを除けばまるで自分の前マスターのよう、と彼女は思った。

「さて、マスターの命令だしな。さっさと情報を持って帰りますかねえ」

女はぐつと足に力を入れて屋根から屋根へ飛び移っていき、やがてその姿は闇夜へ消えた。

第六話（後書き）

青い人が出てきました。

素早い人です。

ぶっちゃん退さん眼を付けられました。

では次回もよろしくお願いします。

第七話（前書き）

先に謝っておきます。ごめんなさい。

自分で書いてて意味わかんなくなっちゃいました。
本当にごめんなさい。

第七話

あれから衛宮邸へと帰った俺たちは居間で先の戦闘について話していた。

というより俺が遠坂さんに詰め寄られていた。

「……で？退さん？説明してもらおうかしら……」

「説明と言われてもなんとはいいいんだ、俺は魔術を知らないから魔術師側がどんなに異常性を感じていても俺はそっちからしたらどこが異常なのかわからないんだから説明しようがない」

「ああ、そうだったわね。いい？魔術というのはね……。」

長い説明で正直全部理解できなかったし覚えられなかったがつまりはこういうことだろうか。

「つまりは魔術は現代の科学力か何かでも実現可能なものを魔術的要素で成し得たもので、それ以外のもの。時間の逆行とかそういう現代科学か何かでも実現不可能なものが魔法……と？」

「そういうことになるわね。そして今回この街で起こっている戦い」

「今日のバーサーカーとの戦いがそうだったのか？」

「そう、聖杯戦争。聖杯という願望器を賭けた魔術師同士の殺し合い」

セイバー

ランサー

アーチャー

ライダー

キャスター

アサシン

そしてバーサーカー

そして七人の魔術師、それが。

衛宮 白

遠坂 凛

イリヤスフィール・フォン・アインツベルン

残りの正体不明の4人

その合計14人が聖杯

万能の願望器

を賭けて殺し合いを繰

り広げる。

それが聖杯戦争。

なるほど、殺し合うに足る戦だと思う。

何せ何でも願いが叶うと言われてる聖杯がこの戦の報酬なのだ。

死んでも手に入れたい宝なのだろう。

しかし解せないことがある。

そんな戦になんで無欲な我が妹まで参加している？この娘が万能の願望器という宝に心揺らぐとは思えない。というより殺し合いを許容するとは思えない。

「白、お前が参加しているのはまさか・・・」

「ああ、この馬鹿げた戦争を終わらせるためだ！こんなくだらないもの・・・終わらせないと」

「何故そこまで必死になる？お前がそういったものを許容できない性格なのはよく知っているつもりだ。だがそれでもだ、聖杯戦争に固執する理由にならない。殺して言ったら現代の戦争だって殺人事件だって一緒だが、それを止めさせたいとは思うが実行は出来ない。それが当然だし普通だ」

「それはそうだけど・・・だけど！目の前で起こっている事なら少しでもあたしは何か出来る！止められるんだ！」

こいつは何を言っているんだろうか。

止める？あの体たらくで？先の戦闘で全く戦えていなかったのに？

「無理だ、お前のどこにそんな力がある？お前より間違いなく強いであろう遠坂さんだってバーサーカー相手には手も足も出なかったんだ。無論俺もな。バーサーカーに勝てる道理がない。」

「そうですね、正直な話私一人でもバーサーカー相手に一人で相手取るのは厳しい」

「ああ、私も弓もバーサーカーの前には歯が立たなかった」

俺の言葉にセイバーさんとアーチャーが同意する。
それに白は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「白、お前は昔言っていたな。己を犠牲にしても全てを救う正義

の味方になりたいと」

「あ、ああ・・・それが？」

「きつとその理想に則ってこの戦争に参加しているんだろうが、その理想が酷く矛盾しているというのをお前は解っているのか？」

そう、矛盾している。

全てなど救えるはずがない、それはどんな超人であれだ。

どんなに力が、金が、権力があっても全てを救うことなど出来ない。何故ならば・・・。

救われるものがあるということは救われないものがあるということだ。

例えば、金に困った男が銀行強盗をし、その事件を白が鎮圧したとする。

そうすれば捕まった者たちは救われるだろう。

だが犯人は？捕まった男はどうなるか？

救われはしない。むしろこれからの人生生きづらくなるだろう。

そこで矛盾が生まれる、全てを救うといったのに全てを救えていないのだ。

しかし、この事件では男は完全に悪だ。どんな理由があれどだ。

ここでもう一つ問題がある。白が目指しているのは正義の味方だ。

正義が悪を救ってどうするんだ？

救った悪が改心するとは限らないし、逆恨みで襲ってくるなんてことにもなりかねない。

彼女の理想は酷く矛盾している。

「だけど、それでもあたしは全てを救う正義の味方になりたい！あたしは、あたしは……！」

「白、俺は別にお前の志を否定はしないし賛成もしない。だがな・
・俺はお前の兄だぞ？」

「……えっ？」

俺はポカンとしている白に笑いかけてやる。

「お前は俺の妹だ、最低限の手助けはしてやる。俺も今回のこの戦争はさつさと終わって欲しいからな。いいか白、全てを救うことはできない。これは断言しよう。だがすぐに納得も出来ないだろう。だからこれを踏まえた上でもう少し、お前の理想を見つめなおしてみろ。お前は一人じゃないんだ。一人で考え込むのはよしとけよ」

「……うん！」

俺は少し笑顔が戻った白に苦笑すると、頭を撫でてやる。

白はくすぐったそうにしながら、でも気持ちよさげに目を細めると、同時に殺気を感じた。

出どころはすぐにわかった。

遠坂さんの傍らに佇む銀髪の弓兵、先の戦いの援護者 アーチャ

ー からだ。

彼女は執拗に撫でられている白を睨みつけていた。

それはまるで、大事な人を取られて拗ねている子供のようだった。

第七話（後書き）

もう訳わかんねえ、シリアスもう二度と書かないぞ。

第八話（前書き）

久しぶり？でもないか。
今回もイミフです。

第八話

「で、今度こそ聞かせてもらうけど退さんのその出鱈目な戦闘力は何？」

仕切り直しと言わんばかりに頑張っただ少重たい口調で雰囲気を作る遠坂さん。

俺はその姿に不謹慎ながら微笑まじさを感じてしまったが、変な絡まれ方をするのは御免なので口にしないでおく。

「俺の知り合いの女の子に会うたび会うたび殺されかけている賜物じゃないか？」

「は？」

遠坂さんは訳が分からないというような表情でポカンとしている。

他も同様だ。白もセイバーさんも一般人の俺が結構な頻度で命の危機に瀕していたことに驚いたのだろう。しかし、何故かアーチャー

何故か呼び捨てしてしまう だけは表情を変えずにむしろ「私は知っていたさ・・・」と言わんばかりのドヤ顔だ。

何故得意げなのだろう・・・。

「いや、ちょっと待ってくれ兄貴。そんな話俺聞いたこと無いぞ」

「だって言っても信じないだろうしな、それに式は根は良い子だと思っぞ？」

「そのシキという者がどんな御人なのかはわかりませんが・・・何

「故疑問形なのですか？」

「なぜってそりゃあの子少し、いやかなり変わってるから。」

「彼女の友達的美樹ちゃんも可愛くて普通な良い子なだけだな。なんでいつも俺の居場所を特定できるのかが謎なのだが・・・探偵でも目指しているんだらうか？」

「で、その式って人と戦って強くなったとでもいうわけ？その式って人も一般人でしょう？」

「ははは、一般人が常にナイフか刀携帯してるって？そんなはずないだろ？しかも動きがなんか常人じゃないんだ、あれ絶対裏の世界ってやつに住人だ」

「普通の人じゃないのね・・・でもここまで強くなる理由にはならないわよ」

「納得しない遠坂さん。」

「そこにずっと黙っていたアーチャーが話に入ってくる。」

「ふっ・・・リンにしる衛宮白にしるまだまだだな。簡単なことだろう？その式という奴に何かしらの特殊な力があつたのではないか？まったく衛宮退の妹が聞いて呆れる・・・」

「むっ・・・！」

「アーチャー、合ってる。合ってるんだがなんで貴方はそんなに満足気なんだ。」

「そしてそうむくれるな白。」

「そう、式は確かに不思議な力があつた。」

「直死の魔眼、式はそう言った。」

「直死？何だそれ？」

「直死の魔眼ですって!？」

知っているのか遠坂さん流石に博識だな。

「式のやつはなんでもかんでもバターみたいにスライスしちゃう力があるみたいでな、そんな奴に狙われてしまった俺は生き残るために戦えるようになるしかなかった。崖っぷちの人の力つてのは不思議なものだ。みるみる実力がついて、今に至る。まあ、式も多分甘えてきてるだけなんだろうが、ほら猫がじゃれるみたいな」

「猫がじゃれてくるのに直死の魔眼なんてあるか!!簡単に死ねるわよ!!！」

そう言って頭を抱える遠坂さん。そして呆れたように溜息を吐いた。そしてとりあえず納得できないが納得したようだ。

「確かに直死の魔眼の持ち主と殺しあつてたらそりゃ強くならざるおえないわよね・・・」

「なあ兄貴。直死の魔眼ってなんだ？」

直死の魔眼とは何か。

対象の死期を視認することが出来る代物だ。

簡単に言えばたいいていのもは何でも殺せる眼だ。

俺も詳しい事は解らないが決して万能な代物ではないと式は言っ

いた。

そういえばそろそろ彼女らに会いに行つてやらないとなあ。機嫌を損ねたら死んでしまう。

「なるほど、とんでもない眼だな。そんな危険な眼持った相手によく生きてたな兄貴」

「そうだろう？そうだろう？大変だったさ・・・」

そう言つて遠い目をする俺。

あれ？何か涙出てきた。

「おかしいな、なんか涙でてきちゃったよ」

「泣きたいなら泣けよ兄貴・・・あたしの胸の中で「いや衛宮白、お前の貧相な胸で眠るのは心苦しいだろう？どれ、私が胸を貸してやる。存分に泣け、退。」アーチャー・・・あたしになんか恨みでもあんのか？」

「ふん、私がお前如きに恨み？そんなものは腐るほどある。それになにより、胸が貧相なのは事実だろう？」

「・・・！い、一応Cはあるぞ！」

「ふん、その程度か。私は因みにEだ。」

あれ、なんの話してたんだっけ。

全然内容変わっていないか？

何故胸の大きさの話になっているのだろうか。

「くっ、だけど胸は大きさじゃない！形だろ！」

「今言いこと言ったわ衛宮さん。」

「シロの言うとおりです。アーチャー、胸は大きさではない。」

「「「形だ」「」」

何故ハモってるんだ。

共通意識でも芽生えたのか。

それをアーチャーは鼻で笑う。

「ふっ、所詮は無いものの妬みだ。それに私は形とハリにも自信がある」

「アーチャー。今は俺のほうが確かに胸はない。だけどお前にはない若さがある！」

「・・・貴様、口にしてはならないことを口にしたな・・・」

もう訳が分からない。

俺は何だかヒートアップし始めた面々を後目に居間を出た。

「おやすみ、皆。やれやれ・・・」

俺は居間と違い静かな我が家の廊下に少し安らかな気持ちになる。

ああ、静か「アーチャアアアアアアアアアア！」「衛宮しろおおお

おおおおおお！」だ・・・。

別段静かでもなかった。

「本当に、めんどくさい奴らだなあ。」

そんな言葉とは裏腹に、俺の頬は緩んでいた。
こんな夜も悪くない。

今宵は本当に、月が綺麗だ・・・。

第八話（後書き）

なんかごめんなさい、うん・

第九話（前書き）

なんかアーチャー壊れてて動かしやすいわー

第九話

翌日、何故か朝っぱらから遠坂さんとアーチャーが我が家の居間にいた。

居間を見渡しキッチンの方へ耳を澄ませるが、物音はない。

白はまだおねむのようだった。だが今は妹はどうでもいい。

今日は朝練はないらしいし今日俺は仕事はない。

まだ起こす時間ではないのもう少し寝かせてやろう。それよりも気になるのは居間で平然と人の家の茶を啜る赤いの二人。何故ここにいるのだろうか。

「あら、おはよう退さん。早いね」

「おはよう」

「あ、ああ、おはよう。・・・なんでここにいるんだ？」

普通に挨拶してくる二人に俺はたじろぐ。

とうにかこの家は遠坂さん曰く結界が外敵の侵入を知らせてくれるではなかったのか。

俺は家の結界に疑問を抱く。しかしその疑問はすぐに自己完結する。ああ、なるほど。つまり遠坂さんに敵意がないから反応しなかったんだろうな。

そう考えて俺は自分で納得する。

「なんでって、白から聞いてない？」

「聞いてない。とうにか呼び捨てか、更に距離が縮まったようで何

よりだ」

「ふむ、凜。簡単に説明してやったらどうだ？退なら絶対、間違いなく、天地がひっくり返ったとしても私たちの考えを理解してくれるはずだ」

「そうね。それにしても私と白が少し歩み寄った位で喜ぶなんて、結構妹思いなのね？そしてアーチャー？少し自重なさい」

だからアーチャーはなんで俺に関することになるとこう性格変わるのだろう。

彼女は普段割とクールな感じの美女なのに。遠坂さんは少し悪い顔で俺をからかう。

だが俺は妹多いというわけではないと思う。

「別にそんなのではないさ。あいつは少し自分を粗末に扱いすぎている。だったら、白を引き止めてくれる聡明な娘に傍に居てもらいたいと思うのは当然だと思うが・・・俺もずっと白の傍に居てやれるわけじゃないんだからな」

「あら、十分妹思いな良いお兄さんだと思いますわ」

「その通りだな。私としては相手が衛宮白というのは誠に遺憾だが退のその想いは、きつと衛宮白も分かってくれている筈だ。嘗てあたしがそうだったように・・・」

「アーチャー？」

「ああ、いや・・・なんでもない」

途中まではつきり話していたアーチャーだが、最後はボソリと呟く程度で聞き取れなかった。

しかし本人が何でもないと云うのならあまり詮索はしないでおう。

「それにしてもアーチャー？貴方やけに退の肩を持つわよね。万が一にもないと思うけど、退さんに近い人物だったのかしら・・・？」

「ふっ、どうだろうな。生憎、凜の乱暴な召喚のツケで記憶に混乱があるので解りかねるな」

「ちょ！そんなこと今言わなくていいじゃない！」

「どうやら遠坂さんは少々？おつちょこちよいのようだ。」

「アーチャーはそんな遠坂さんをからかい笑っていた。」

「平和な風景だ。とても昨日あんな戦闘があったとは思えない。」

「いや、それより話が忘れていたことがあった。」

「それで、結局なんで二人はここに？」

「ああ、そうだったわね。実はね、私と白は同盟を組んだの。対バーサーカーのね」

「バーサーカー、ああ・・・あのとてつもなく危険な輩か・・・可愛らしいところもありはしたが」

「そう。そのバーサーカーなんだけど、どう考えても私とアーチャーじゃ適わない。勿論白、セイバーも同様ね。セイバーは戦えるとしても白が足手纏いになるし、相手はあの大英雄ヘラクレス。その

上バーサーカーのクラスにも関わらず自我を保ちつつバーサーカーのクラスになる際の能力強化もしっかり付いている。で、極めつけに宝具『十二の試練』ゴッド・ハンド」

「うわ、実際に相対したから余計に危険さが窺えるな。それにヘラクレスっていえばあらゆる武器の達人だ。反則もいいところだな。なるほどな、個々じゃ適わないから同盟・・・か」

「そういうこと。それで同盟を組むなら住まいを共にしたほうが何かと都合がいいの。というわけで私今日からここに住むから」

突然だな。まあしかし俺としては遠坂さん白の傍に居てくれるというのは助かる。

俺は別に構わない。白も別に気にしないだろう。問題は大河と桜ちゃんだ。

「はあ、俺は別に構わないが、他の住人の説得は自分で何とかしてくれよ？俺は責任持たんからな」

「勿論、この遠坂凜。見事に皆さんを丸め込んでご覧に入れますわ」

「では、私は最初に少し希望を出しておこう。相当重要な案件だ。」

唐突にいやに真剣な表情でアーチャーは話してくる。重要な案件とは一体何のことだろうか。

「私は退と同じ部屋が「アーチャー、貴方は終始屋根の上で周囲を見張ってなさい。以上。」なに！凜、それはあんまりだろう！」

「今呪使うわよ？」

「・・・ぬぐう。」

あまりに締まらない一同であった。

第九話（後書き）

凜が衛宮邸の住人に。

アーチャーは屋根上に永久就職し・・・かける。

第十話（前書き）

あのお方が出てくるので「あれ

第十話

今日、あたしは珍しく土蔵ではなく部屋で目が覚めた。

理由は単純、昨日は遅くまでアーチャー達と聖戦ジハードを繰り広げていたから土蔵に行かなかつたからだ。

しかしあたしは少しだけ違和感を覚える。違和感の正体はすぐにはわかつた。

「兄貴の声で起きられなかつたから・・・かな？つて、何言ってるんだあたし！？これじゃまるであたしがその・・・兄貴に起こしてもらえないと寂しいブラコン女みたいじゃないか・・・」

あたしは頭を抱えながら布団の上で恥ずかしさのあまりゴロゴロと転がる。

少し涙目であたしは布団から立ち上がる。

「そんなことはどうでもいいんだよ。それよりアーチャーのあの兄貴への態度はなんなんだ！まるで・・・そう！あれじゃまるで恋する乙女だ！・・・まさかな」

あたしは猛烈な不安に駆られた。

何せアーチャーと兄貴はまだ会って二日位だ。

そんなハイスピードで恋に落ちるなんてあるわけ・・・。

「で、でも恋愛に時間は関係ないって椎名が言ってたし・・・ううう、うあああああああああ！！」

慣れないことで悩んでいたあたしの頭は、早朝からオーバーヒートした。

いつもの様に目を覚ます。

目を開くとそこに広がっているのは相も変わらぬ白い天井だった。

俺　両儀式　は眠っていたベッドから身体を起こし己の住んでいる部屋を見渡した。

特に目を引くものはない。あるとすれば衣装掛けに掛けられた赤いジャケットに、フローリングの床に直に置かれた電話位なものだ。

俺は冷蔵庫に向かい、それを開くと水の入ったペットボトルを取り出し、口を付けた。

とある夢を見て身体が火照っていたからいつにもまして喉を通る清涼感が心地好い。

「・・・ふう」

無意識に溜息を吐いた。

夢というのは割と付き合いの長い友人　黒桐美樹　とこれまた付き合いの長い友人　衛宮退　の夢だ。

自分らしくもなく幼稚で可愛らしい夢だった。

三人で街に繰り出して、飯食って、いつもは行かないような遊園地みたいな施設ではしゃぐ。

そんな俺らしくない夢だ。

しかし夢に見たということとは少なからずそう言った願望が内にあるのだろう。

ならば実行に移せばいいと思う。だがそれは叶わない話だ。

美樹は呼ばなくてもふらりと現れるだろうが、退はそうはいかない。何より住んでいる街が違う。アイツは普通に仕事をしているからそうそう会えないのだ。

「・・・会いたいな、退に」

出会いはただ俺がアイツを襲った。それだけだ。

しかしアイツは予想外に良い動きで俺を迎撃した。聞いた話じゃ戦いに関しては素人だったらしいが元々才能があったのだろう。アイツはその殺し合いの中で凄い速度で力を付けていった。

流石に素人に負けることはなかったが、それでも退は凄かった。

だから俺は家に連れて帰り、一応手当をした。

その時偶然家に来た美樹に男を連れ込んだと勘違いされたときは内心少し焦った。

それからだ。俺と美樹と退の付き合いは。

「こんにちわー、式？起きてるかな？」

物思いに耽っていると聴きなれた声が玄関から聞こえた。噂をすれば影、十中八九美樹だろう。

「ああ、美樹か。鍵は空いてるぜ」

ガチャリと扉の開く音がする。直ぐに美樹は姿を現した。

普通の容姿に黒尽くめの眼鏡女。だが眼鏡で解りづらいたけでその実、美樹は美女だと思う。

しかし現れた当人は何やら膨れっ面をして怒っていた。

「まったく・・・式、鍵をかけないと駄目だってあれほど言ったじゃないか。式は女の子だし美人なんだから気を付けないと」

「俺が男に襲われるなんてあると思うか？」

「それは・・・想像つかないけど、万が一ってあるじゃない」

美樹の言いたいことはわかる。しかし、俺が鍵を掛けないのには理由がある。

退はこの合鍵を持っていないのだ。だから万が一アイツが訪ねてきたときに俺がいなかったら入って待っていていられるようにという俺なりの配慮だ。

しかし美樹にそれを伝えると・・・。

「あはは、式って本当に退さんの事好きなんだねえ」

俺は納得がいった。

そう、好きなんだ。好きだから近くに居ないと寂しい。ただどアイツは近くどころか街さえ違う。

自覚してはいたが改めて思うと少し恥ずかしいものがある。

「そういう美樹も・・・だろ？」

「ふふふ、まあね。式の恩人だし、小川マンションでは助けてもらっちゃったしね」

あの時本当にかっこよかったよ、と微笑む美樹。

しかし少しすると少し、ほんの少しだけいたずらっぽい表情で笑って言った。

「ねえ、式。会いに行ってみない？退さんに」

「行く」

気づいたときには俺は即答していた。

仕方ないと思う。会いたい。会って色々話したい。出来たらちよつと戦いたいなと思わないでもない。

「じゃあ二日後、駅で待ち合わせよう。遅れちゃ駄目だよ？式」

「ああ」

「ふふふ、式凄くワクワクしてたな。付き合いが浅い人にはわからないレベルでだけど」

ボク 黒桐美樹 は式の家の帰り道、退さんに会いに行こうというボクの誘いに乗ったときの式の様子を思い出し、思わず笑みが溢れた。

それにしても式は相変わらず私生活での危機感がなさ過ぎると思う。式は中性的で綺麗な顔立ちで肩口で切り揃えられた髪もさらさらで綺麗だ。

更にはいつも和服にジャケットという変わった恰好なのにそれすら違和感を感じさせない美人だ。

なのにあの危機感のなさ、一時は眩暈がしたものだ。

「まあ、それもきつと愛ゆえなんだろうけど」

式が退さんのことを慕っているのは一目瞭然だ。

かく言うボクも彼のことを慕っている。異性としてと言っても過言ではないくらいに。

「なんだか、遠足の前日の小学生の気分だよ。ボクも何だかワクワクしてきちゃったよ」

ボクは遠出する事を伝えるに、上司 蒼崎橙子 の元へと向かった。

その頃噂の退はといえば。

「だから胸なんて飾りだって・・・言ってるだろうがあああああ
！」

「ふん、まだわからんのか。貴様では私には勝てん」

「アーチャー、そのような態度では足を掬われますよ」

「どうせ、どうせあたしは胸が小さいわよ！悪かったわねえ！！」

「まだ続いてんのか、その話題」

朝皆が集まったと思ったたらまた聖戦を始める4人に呆れ果てていた。

第十話（後書き）

はい、式と黒桐さん登場です。

どういう立ち位置にしようかしら

感想で指摘された式の容姿の描写を追加してみました。いかがでしょうか。

第十一話（前書き）

今回はなんてことはない新しい出会いのみです

第十一話

「さて、なんか白達の不毛な争いは終わりそうもなかったし仕事もないから適当に歩いてみたが・・・。」

俺は何となく柳洞寺へ足を向けていた。

久しぶりに赴いた柳洞寺には少し違和感があった。

そう、それは酷く単純で門の前にあった。

長刀を背負った時代錯誤な中世的な美貌を持ったポニーテールの侍が門の前で暇そうに胡座をかいているのだ。

その侍はこちらに気づくとチラリと一瞬こちらを見たあと溜息を吐いて退屈そうに頬杖をついた。

何なんだあの侍は。あんな侍いただろうか。

いるわけない。いくらなんでも時代錯誤すぎる。

冬木にあんな流麗な侍コスプレ人間がいるなんて噂一度も聞いたことがない。

あれほど美しい人ならば噂になるはずなのだが・・・もしかして、いやないとは思っただが。

サーヴァント・・・だろうか？

刹那、侍は突然立ち上がり、凜とした佇まいでこちらに近づいてきた。

形の良い唇から美しくも少し冷たさを感じる声が紡がれる。

「お主、私の暇潰しの相手になってはくれまいか？」

俺は突然の行動に少しの間固まってしまう。

まさかこの時代に生まれて侍っばい人に話しかけられるとは思わなかった。

俺が反応できないでいると侍は露骨に残念そうに溜息を吐く。

「・・・やはり聞こえんか。姿を晒せばよいのだがな・・・しかしそういつわけにもいかぬか。私は今はサーヴァントなのだから」

俺は安全を考えるならサーヴァントに迂闊に話しかけるべきではないと思ったが、この侍なら大丈夫なんじゃないかと思った。何か凄い暇そつで気の毒だし。

「あー、えつとお侍さん？姿見えちゃってますよ？」

「えつ・・・？」

侍は俺の方へと目を向けるとその涼やかな美貌が満面の笑みに変わる。

「お主、私が見えるのか！」

「あなたはもしかしてサーヴァントですか？」

サーヴァントという単語を聞くと侍は冷静に問ってきた。

「お主何故サーヴァントを知っている？もしや魔術師か？」

「いや、俺は魔術師じゃない。少し面倒事に巻き込まれた一般人だ。あと姿見えてるのは貴方が霊体化するの忘れていただけでは？俺にそんな霊体見る特殊能力なんてないし」

「なに？」

すると侍の姿が一時消える。

そして少し経つとするとちよつとだけ恥ずかしそうに侍が現れた。

「どうやらお主の言うとおり霊体化を忘れていたようだ。いやいや恥ずかしい姿を見せてしまったな。あまりに暇で霊体化を忘れてしまつとは気を抜きすぎていた。しかしお主まさかとは思うが、聖杯戦争に巻き込まれたか」

「ああ、偶然サーヴァントの戦闘に居合わせてしまいました」

俺は侍と話していて少し違和感を覚える。

遠坂さんの話ではサーヴァントは目撃者、魔術的なものを目にしてしまった一般人は排除してしまうものだと聞いた。

しかしこのサーヴァントにはそのような素振りが一切ない。

「あの貴方は何故ここに？」

「ふむ、久方振りの話相手だ。他言せぬと約束するのであれば話そう。いや、愚痴を聞いてはくれぬか？」

なにやらこのサーヴァントにも色々事情があるらしい。

俺はなんか苦勞してそうだし愚痴を聞くくらいならいいかと頷いた。

「なるほど、ここで門番を」

「うむ、私のマスター・・・これがとんでもない女狐なのだが。その女狐にこの山門を依代に召喚されてしまったな、ここから動けんだ」

そう言つて侍は溜息を吐くと何か思い出したのか「あっ」と声を上げた。

「名乗るのが遅れたな。私はアサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」

「佐々木小次郎？つていうことは男性の方だったんですか？てつきり女性かと・・・」

「いや、私は女だが？」

「え？」

「ん？」

佐々木小次郎とは男ではないのか？

深く気にしない方がいいのだろうか？

・・・気にしないで置こう。俺にとってさほど重要なことでもない。

「いえ、すみません。何でもありません。アサシンさんと呼びしても？」

「敬語はいらぬ、アサシンでいい。久方振りの話し相手なのだから余所余所しいのは少し寂しいものであるう？」

「そうですね・・・じゃあよろしくアサシン」

「むむ」

正義の味方を志す少女の兄と群青の侍の邂逅。

第十一話（後書き）

アサシンさん出ました

ポニーテールが素敵な美人侍さんです

得意技はなんか同時に三回切れる凄いヤツ

番外 衛宮兄妹の朝（前書き）

色々捏造が入っています

番外 衛宮兄妹の朝

あたしの兄はよくわからない人だ。

何年も共に過ごしてきたのに分かることと言えば片腕を10年前の火災で無くしたと穂群原学園で清掃員をやっているということ位か。

あ、あとは好きな服のデザインとか好みの味付けとか趣味とか身体を洗う順番とか。

まあそんなことはどうでもいい。

今日はそんな兄とあたしの朝の様子を試してみようと思う。

兄の朝はあたしを優しく、優しく起こしてくれるところから始まる。何を隠そうあたしは朝が弱い。直そうと努力してはいるのだが今だ克服できていない面だ。

これでは正義の味方なんて夢のまた夢じゃないか……。

「おはよう白、ほら寝癖がついてるぞ。直してやるからおいで。どうせまだ覚醒仕切ってないんだろ？ 後で慌てて直すのも手間だろうからな」

「ふみゆ……」

そう言って優しく、【本当に】優しく兄は寝癖を直してくれる。頭を優しく撫でられているようで心地好いものだ。

意識が覚醒し始めたところで兄の姿を確認する。

所々が少しハネた短い黒髪に黒曜石の様に綺麗な黒い眼。

灰色のＴシャツに黒いジーンズ。

容姿は眼が多少つり上がっておりお世辞にも美男子とはいえないが身内鼻肩を抜きにしてもそこそこに整っている。そして正直見た目真っ黒だ。

そんな兄だが今まで女性の影があったことはあまりない・・・なんてこと言うとも思っただか。

あたしの友人である間桐椎名。

間桐家の長女で容姿端麗、頭脳明晰、更には気が利いて優しいという完璧なヤツだ。

その椎名が好意を抱いているらしい。

椎名は昔、家で色々なことがあって荒れていたことがあったらしい。話では自分にはある才能がなくて絶望したのだとか。

それで荒んでいたときに偶然現れたのが兄だったそうだ。

そして兄は椎名にこう言ったそうだ。

「才能がない・・・か。誰しもが通る道ではあるし何の才能がなかったなんてのは聞きはしない。君の事だ、相応の努力だったんだろう。だがそれが報われず今に至る・・・か。それで絶望したのかい？」

「そうよ、間桐家においてその才能なくしては長女たる資格はない！私がいる意味すらも！」

「それで君は諦めたのか？」

「え？」

「その才能のない分野を別の何かで補おうという気概は君にはなかったのか？俺の知っている君はもつとしぶとかった。何かあるうと前を向いて歩く娘だった。とはいえ俺だってその家柄で必要な才能がないと言われれば君のようにならないという保証は出来ない。所詮はもしもの話だしな」

「・・・」

「だが君は、そうじゃないだろう？君はそこで諦めるような人間ではないはずだ。俺が言っても説得力は皆無だと思いがな。まあ、少しでも気に留めてくれれば嬉しい。じゃあな。」

「・・・そう、か。まだ終わってない。私は間桐家の跡取り、間桐椎名。こんなところでへこたれて立ち止まっている暇なんて私にはない・・・やってやる、そして絶対に御爺様を見返してやる！そして桜も私が救い出す・・・いつか必ず！」

あたしは詳しくは知らないがその兄のおかげで椎名は今に至るらしい。

兄曰く、「俺はあの娘の中の有り余る闘争本能に油を注いだだけだ。まあ要は焚きつけただけだ」らしい。

椎名もそれは知っていたらしいがそれでも助かったのは事実だからと改めて礼を言ったそうだ。

正直、何でもかっても妬ましい。

後、怪しいのは何人かいるが断言はできないので伏せておく。

「よし直ったぞ・・・どうした白。ぼーっとして、」

「え？いや、何でもないよ兄貴」

「そうか、何かあったら言えよ」

「うん」

あたし達は何年も一緒にいたんだ。今では義理とはいえ兄で同じ苗字を貰った、唯一の肉親だ。

兄はたまに抜けているし隠し事も多いし、聞いてもはぐらかしちゃう掴みどころのない人だけど。

あたしにとってはどこまでも頼れる、頼もしいお兄ちゃんだ。

「兄貴」

「どうした？白」

「あたしを置いてどっか行ったりしないでくれよ。もう二度と、大きなモノを失いたくはないから」

「・・・お前こそ、俺から離れるんじゃないぞ。今までもそうだったように、支え合って生きていこう」

「うん・・・約束だ」

血筋の異なる、それでも間違はなく家族である二人の、朝の一頁だ。

番外 衛宮兄妹の朝（後書き）

主人公についての描写がないと指摘を受けたので執筆いたしました
番外編です

細かい描写はできませんでしたが大まかな容姿、人格が分かってい
ただけたら幸いです
次回から本編に戻ります

アンケート

突然ですがアンケートを取らせてください。
多少聞き覚えがあるかと思わんでもないですが、言峰綺礼や間桐の
じいさまなどTSについてです。

私はとりあえずお爺様などのキャラをTSするつもりは毛頭ありま
せん。

だがしかし言峰氏については少々悩んでおりました。

ほら、シスターさんって素敵じゃない？

爺様はTS無しほぼ確定です。

という訳で内容は言峰氏のTSの有無。

1、言峰TS有り 少し底の知れないシスターさん・・・素敵じゃ
ない？

2、言峰TS無し 何気に主人公とこう食事し談笑とかする仲とか
にしたら面白くね？無理だろうけど

というわけでよろしければご協力くださいませ。

アンケート方法はメール感想方法は問いません。

アンケート終了は相当数集まったら随時終了します。

その時は新話を更新するでしょうるので、実質私が次回更新するまで
が期限になります。

ではよろしく願います。

第十二話（前書き）

泰山についてあまり覚えておらず、脚色してしまっている場所があるかもしれませんが多目に見てくださいと嬉しいです。

第十二話

「私は山門から離れることは出来ぬ、故に退に頼みがある・・・」

そう言つてアサシンは神妙な面持ちで俺を見る。

俺はその雰囲気黙つて用件を聞かざる終えなくなる。

一体何を頼むつもりなのだろうか。

「この時代にある菓子で共に茶でもしたいのだが…どうだろうか？」

「・・・そんなことが、ああ構わない。どんなものがいい？」

俺はあまりに軽い内容の頼み事に拍子抜けしたが、佐々木小次郎といえど女性。この時代のお菓子に興味あるのだろう。自分で食いにいこうにもアサシンは山門に縛り付けられているため行けない。

俺はアサシンの頼みを承諾する。

するとアサシンは嬉しそうに微笑んだ。

「そうか、引き受けてくれるか。せっかく友が出来たのだ、談笑の一つでもせねばな！」

「友?・・・ふふっ、そうか、そうだな。俺たちは友達だ」

「そうであろう?はっはっは!」

少しの間俺たちは笑い合う。

同じ時代に生まれなくともこうして出会い、友情を結ぶことが出来る。

俺は今日この時初めて魔術というものが少し悪くないものだと思うた。

アサシンが所望したお菓子は何でもいいとのことだった。何故と聞けばなんてことはない当たり前な言葉が帰ってきた。

『私はこの時代の菓子をよく知らぬ・・・』

『・・・ですよねえ』

考えてみれば当たり前だ。彼女は佐々木小次郎、この時代の人間ではない。

なればこそこの時代について詳しく知らないのは自明の理。聖杯がある程度知識を与えてはくれるらしいが流石にそんな知識は与えてくれないのだろう。

「うーむ、何にしようか・・・」

アサシンが求めているのは恐らく和菓子ではなく洋菓子のような食べたことのない菓子だろう。

この際お茶に合う合わないは考えないでおこう。

「となると・・・プリンだな。間違いない、ベストオブ現代のお菓子だ。プリン以上に素晴らしいモノはないと確信している。俺の中では・・・」

プリン・・・俺はあれが大好きだ。

以前大河に冷蔵庫のプリンを食べられたときは流石の俺も刀を抜きかけたものだ・・・。

物思いに耽つてもいられない。あまりアサシンを待たせるのは悪いだろう。

凄くウキウキしていたし・・・早めに買ってきてやろう。

そしてプリンを買った帰り・・・あんなことがあるとは夢にも思わなかった・・・。

「まさかプリンがどこにもなくて五、六軒はしごさせられるとは思わなかったぞ・・・」

俺は項垂れながらアサシンが待っている柳洞寺を目指す。

刹那、悲鳴が聞こえた。

「ぐあああああああ!!」

高く澄んだ美しい声だが品性の欠片もない悲鳴だった。

しかし品性があるとかないとか関係ない。

俺はとにかく悲鳴がする方へと走った。

「じ、じじは……」

そこは一軒の中華飯店だった。

一見普通の中華飯店だし、味も悪くない。むしろ良いほうだろう。だが、この店 泰山 には一つ問題のあるメニューがあった。

それが……【麻婆豆腐】。

あれは凡そ人類が食してよい食物ではない。

一種の兵器と言つてもいいだろう……と白が言っていた。

俺は食えたし美味かつたんだがな……。『少し』辛かつたけど。

「しかしここから悲鳴が聞こえたということは……そういうことなんだろうな」

間違はなく麻婆豆腐を食べて悲鳴を上げたのだろう。

常人は一発KOらしいからな。白曰く。

「やれやれ……一体どんなやつなんだ？」

俺は恐らく泰山の麻婆豆腐を食べて悲鳴を上げた相手を見に泰山へと入っていった。

「いらっしやいませアルー！あれ？退さん？久しぶりアル」

出迎えてくれたのは小柄な女性だ。
泰山の定員で、わりと仲がいい。

「ええ、お久しぶりです。悲鳴を聞いて駆けつけましてね・・・麻婆？」

「麻婆アル」

「案内してもらえますかね」

「勿論アル」

店員に引き連れられた場所には一人の長身で金髪の女性が倒れていた。

白目を剥いて気絶しているが・・・。

「ふう・・・このままにもしておけんか。店員さん、店の奥を借りても？」

「退さんだったら安心アルネ。いいアルよ」

店員の上承を得ると俺は女性を背負い、店の奥へと入っていった・・・。

第十二話（後書き）

というわけでアンケート結果を発表させていただきます。

18対3でアンケート1、TSしよわず、が勝ちました。

という訳で言峰氏はTSしてシスターさんとする方向で話を構成していこうと思います。

アンケートを2にしてくださいの方はご期待に添えず申し訳ございません。

また、アンケートに答えてくださった21名の皆様、ご協力ありがとうございました。

第十三話（前書き）

どうもです

今回かなりの手抜き感が出ています

手を抜いたつもりはありませんがどうも文が浮かばなくて・・・で
はどうぞ

第十三話

あれから俺は白目剥いた金髪女性を店の奥の控え室に運んだ後、いくつか配置してあったパイプ椅子を並べて簡易的なベッドを作りその上に女性を寝かせた。

そして干してあったタオルを濡らして女性の額にのせた。

女性は今だ「まーぼーが・・・まーぼーがくる・・・ううう」と魔されている。

恐らく彼女にとってこの泰山はトラウマとなったに違いない。

「やれやれ、あれは中々美味しいと思うんだがなあ・・・そうお目にかかれない辛さで」

俺は何故あれで気絶するのか理解できず思わず唸る。

刹那、寝かせていた女性の目が開いた。

女性は思い切り身体を起こし・・・。

「はっ！妾は一体ぎゃふ!？」

パイプ椅子ベッドから思い切り落下した。

そりゃ落ちるだろうな。所詮パイプ椅子だからそんな横幅ない上に思い切り身体を起こせば・・・。

「大丈夫ですか？」

俺は一応身を案じる。

そして彼女の前で腰を落とし起こしてあげようと手を差し出す。

すると女性は赤い瞳で俺を何故か睨みつけると思い切り立ち上がり口を開く。

「貴様何者だ？妾の前にいるのだ、まずは貴様から名乗り出すが礼であるう？それすらままならず剩え妾を見下すとは・・・分を弁えよ下郎」

・・・なんだこの人。

名乗らないのは多少こちらに配慮が足りなかったかもしれないが、見下すって確かに物理的には見下したが・・・。それに分を弁えろってどこぞのお偉いさんか何かか？

それに妾なんて一人称あまりにも時代錯誤・・・時代錯誤？

『この時代にある菓子で共に茶でもしたいのだが…どうだろうか？』

しまった！アサシンが待っていたのを忘れていた。

謎の金髪女性に構っている暇はない！

・・・のだが。

「申し訳ありません。俺は衛宮退、ただの清掃員です」

「ふん、分かればよい。せっかくだ。妾も名乗るとしよう。妾の名を聞いたことを光栄に思うがいい」

「・・・」

なんだこい・・・この人は。

めんどくさいって話じゃないぞ。ていうかなんで上から目線なんだ。それに妾ってやっぱ時代錯誤だな。

もしかして・・・サーヴァント？サーヴァントであるならばまず生まれ時代が違うのだから時代錯誤感もうなずける。

いや、そんなはずはないだろう。一日に二人もサーヴァントに会う

なんてそんなことあるわけじゃないか。根拠はないが。しかしこの女性の相手がめんどくさいのは間違いない。俺の感が言っている……。

こいつ……この人と関わるとめんどくさい且つ長くなると。早々に切り上げて逃げるとする。

「それでは俺は人を待たせているので」

そう言つて俺はダッシュで泰山を後にした。

後ろから女性の怒号が聞こえたが知つたことではない。

俺はあまりああいふタイプの女性は好みではない。

あまり関わりたくはないものだ……。

「今戻つたぞアサシン……」

俺はやつと柳洞寺まで戻つた。

俺の姿を確認するとアサシンは朗らかな笑顔で迎えてくれる。

アサシンの笑顔は何だか癒される。とてもに優柔らかい笑顔だ。

佐々木小次郎……かの剣豪とは思えない。

「おお、戻つたか。して……目的のモノは手に入つたのか？」

「勿論だ。お茶も割と良いものが手に入つたぞ。……変な女性に絡まれかけたが」

あの金髪の女性、めんどくさそうなのもあつたが何とも言えない危険な感じがした。

何がとは明言出来ない。それでも何とも言えない、逆らってはならない感じがしたのだ。

「・・・今にしてみれば王様・・・暴君のような言葉遣いだつたな」

「？」

アサシンには俺の咳きは聞こえておらず、長いポニーテールを揺らしながらキョトンとした顔で首を傾げる。しかしそれも僅かな間で、アサシンはワクワクとした様子で俺に訪ねてくる。

「それで、退が買ってきた菓子は何なのだ？」

「ああ、プリンっていう菓子だ。どんなものは・・・食べてみれば解るさ」

そう言つて俺はプリンとお茶と紙コップと皿、そしてスプーンを取り出し、風情のあまりないお茶の準備をする。

プリンは容器から出せるタイプだ。俺はそれを皿に出し、コップにお茶を注いでアサシンに渡した。

アサシンはスプーンとプリンを交互に見る。

「このすぷーんとやらでぷりんを食すのか？」

「そう、そのスプーンでプリンを掬つて食べるんだ」

「そうか・・・では早速」

アサシンは恐る恐るプリンを掬い口に運ぶ。
すると不安そうだった表情からぱあっと明るい表情になる。

「美味だなこのプリンというものは！」

「はっはっは、そうだろう？俺も好きなんだプリン」

喜んで貰えたようで良かった。

梯子してまでプリンを買ってきた甲斐があったというものだ。

「それじゃあ、俺も・・・頂きます」

お茶が終わってから俺たちの談笑は続く。

気付けば辺りはもう暗く、それまで人が通りかからなかった事に奇妙な跡を感じた。

通りかかられていたならアサシンにはコスプレポニテ女の称号が送られたに違いない。

サーヴァントと知らなければただのコスプレイヤーだし。

「退、そろそろ戻らなくてはならないのではないか？」

「確かに、そろそろいい時間だな。妹が心配しているかもしれない」

俺はお茶で出たゴミを買い物袋にまとめ、帰る準備をする。

「退。また会いに来てはくれまいか？一人では暇なのだ」

「ああ、また必ず来るさ。アサシンといると何故か癒される」

「くっくっ、なんだそれは？」

アサシンは俺の言葉に笑顔を零す。

俺は「じゃあまたな」と帰ろうとした。

刹那。

「マスターの命令で柳洞寺に偵察に来てみれば・・・まさかバーサーカーと戦った兄ちゃんがいるたあな・・・。俺は運がいいねえ。」

殺気を感じた。

こちらに向かって突進してくる謎の青い影。

その影はとてつもなく速く、暗闇の中ではその姿を認識することも難しい。

恐らくサーヴァント。

ならば同じサーヴァントに行くかと思いきや、その影は一直線に俺に向かってくる。

そして影が思い切り突き出してきたのは赤い槍。

禍々しい雰囲気を漂わせた物体。

その槍の一撃は、その攻撃を繰り出してきたモノ同様に鋭く、速い。

「ぐっ!!」

俺は辛うじてそれを身体を捻って躲す。

そして体勢を立て直し、影・・・襲撃者の姿を確認した。

蒼いボディースーツに身を纏い同じく青く所々がツンツンとはねている長い髪を後ろで束ねた女だ。

俺は女に問うた。

「あんた・・・何者だ」

「ランサーのサーヴァント・・・一手手合わせ願おうか？」

第十三話（後書き）

金髪ねーちゃんの出番ではなかったですが、
すぐすぐ再登場するかとは思いますが。

かわりに現れたのはランサー。
どうなることやら。

第十四話（前書き）

お久しぶりです

第十四話

「ランサーのサーヴァント……」

「ああ、お前さんの事は知ってるぜ。バーサーカーと短時間ながら戦い生き残った一般人……。いや、魔力を纏っていないとはいえあのバーサーカー相手に生き残ってたんだ。一般人の部類じゃあねえわな」

俺はランサーのサーヴァントが言うバーサーカーとの戦いを思い出す。

彼女の技術と力とスピード、体力。

どれをとっても敵うものがなかった気がする。

それを見ていたというランサー。

どうでもいいが聖杯戦争とやらには女性しかいないのだろうか。

「それで……。それが一体俺を襲撃したのとどう繋がるんだ？」

「簡単な事さ。それほどまでの武人を前にしているんだ。手合わせ願いたいと思うのは同じ武人として当然だろう？」

どうやらランサーは俗に言う戦闘狂のようだ。

どこの英雄だか知らないが酷く困る。

何せ今は……。

刀を持ってきていないのだから。

「さあ、一手手合わせ願おうか・・・兄ちゃん」

「くっ・・・」

俺はとにかくランサーから距離を取ろうと足に力を入れる。
刹那。

「待て」

凜とした声が俺たちを制止した。

声の主はアサシンのサーヴァント、佐々木小次郎。
その手には月明かりに煌めく一振りの長刀。

「・・・貴様、何者だ。サーヴァントのようだが？」

「アサシンのサーヴァント・・・佐々木小次郎」

アサシンが名乗るとランサーは驚きのあまり先程までの獣のような表情から警戒心を剥き出しにした表情になる。

無理もない。遠坂さんに聞いた話ではサーヴァントが真名を明かすのは弱点を晒すようなものなのだという。アサシンはそれを躊躇いなく行なったのだ。警戒するのも当然と言える。

「貴様・・・何故真名を明かした？」

「何故とは？立ち会いの前に名を明かすのは当然であろう？」

「ほう・・・？つまりお前が俺の相手をする？」

ランサーの言葉にニヤリと笑うと快活にアサシンは笑う。

ランサーはそんなアサシンを訝しげに見る。

「見たところ、今退は獲物を所持しておらぬ。まさか丸腰の相手、それも友が襲われているのを黙ってみているほど私は残酷な人間・
・いや、サーヴァントではない」

「・・・何故一々言い直したんだ？」

「いや、よく考えると私は今は人間ではなかったのだと思い出して
な。ハッハッハ」

アサシン・・・こんな状況で天然さを出さなくていいだろう・・・。
ランサーも困り顔で佇んでいる。

その時アサシンがこちらに声をかけてくる。

「退、今のうちに退け。ここは私が」

「・・・頼む」

ここはアサシンの言うとおり退くべきだろう。

このまま残ったところで何を出来るわけでもないし、体術も出来る
がサーヴァントを相手に出来るほどの練度はない。
ならば一度ここは退くべきだろう。

「すぐに戻る。それまで頼んだ！」

「ふっ、任せておけ。私もそれなりに腕には自信がある。そう簡単
には敗れぬよ」

「はっ！イイぜ、かかってきな侍。俺の槍、そう簡単には止められ

んぞー!!」

「果たし合おうぞランサー……!!」

戦闘が始まると同時に俺は走る。

衛宮邸に向かつて全速力で。

アサシンを信じているがそれでも万が一というのがあ

「まだ出逢ったばかりなんだ……終わらせるにはまだ早い!」

「うらぁああああ!!」

「ぶつ……!!」

赤い軌跡と青い軌跡がぶつかり合い火花を散らす。

その軌跡の正体は赤き魔槍とスラリと伸びた長刀。

それを担うは蒼き槍兵と群青の侍。

二人の間合いは常に一定。

アサシンは門の前から一步も動かずにいる。

ランサーは一步も詰め寄ることが出来ず、責めあぐねていた。

「流石はランサーのサーヴァント……大した速さだ」

「てめえこそ大した腕だな……まさか俺の槍が悉く受け流される
とはな」

「ふふっ、だがお互い奥の手は見せておらぬ。そつであるじつ？ランサーよ」

ランサーはアサシンの言葉に嗤う。

そしてスツと槍を構えるとふつと息を吐いた。

「ならば喰らうか？我が必殺の一撃を・・・」

「面白い・・・」

アサシンもまたゆらりと刀を構えた。

お互いの間に緊張が走る。

そして、ランサーの槍にとつもない魔力が籠もり始める。

その様子はまさに魔槍の名に相応しい。

・・・が。

「・・・！？ちい・・・今良いところなんだがな」

「どうしたランサー」

アサシンの質問にランサーは構えを解きつまらなそうに溜息を吐いた。

「マスターの命令でな、帰還命令だ。せつかく良いところだが・・・すまんなアサシン。この勝負預ける」

「退くというなら追いはせぬ。私の役目は山門を守ることのみでな・

・・・」

ランサーはアサシンの言葉にハッ！と笑うと来たときと同じくとても早い速さで姿を消した。

ランサーが消えるとアサシンは一息ついて刀を収めた。

それも束の間、アサシンは新たな気配を感知した。

アサシンは長い階段の下を見る。

そこに立っているのは騎士甲冑に身を纏った小柄な少女だった。

美しい金髪を月明かりで照らす姿はとても美しく戦に臨んでいるようには見えない。

しかし、人は彼女の事をこう呼んでいる。

最優のサーヴァント【セイバー】と。

「急がないと・・・」

俺、衛宮退は土蔵に置いておいた刀を手に柳洞寺へと引き返す。

刀を鳥に帰った時には既に衛宮邸は寝静まっており、何も言われることなく刀を回収出来たのは幸いだろう。

サーヴァントを助けに行くと言えば皆に何を言われるか分かったものではない。

「頼むから無事でいてくれよ、アサシン」

だが俺はこの時、まさか身内がアサシンと剣を交えているなど知る

由もなかった。

第十四話（後書き）

もう書いててわけわかんねえ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1900x/>

Fateなんとなく書いてみた

2011年11月9日02時13分発行